

2. 19 世紀後半における清露間の国境画定交渉と地図作製

大坪慶之（三重大学）

0. はじめに

中国における地図作製は、19 世紀半ばから 20 世紀初頭に大きな転換期を迎えたとされる。清朝は、アヘン戦争後の内憂外患のなか、現況を把握し有効な統治を行うためにも、正確な地図を必要としていた。しかし、既存の「乾隆内府皇輿図（乾隆十三排図）」は、作製より相当の時間が経過し、内容と現状が一致しない部分が多くなっていた。加えて、当時の製図技術は、康熙・乾隆期を最後に大規模な測量事業が実施されず、西洋と比べ大幅に遅れを取っていた。そのため、1860～70 年代より西洋近代的な技術の導入と人材育成が進められていくことになる。

日清戦争以前の 19 世紀を対象とする中国地図に関する研究は、「皇輿全覽図」「乾隆内府皇輿図」とそれにまつわる事象を詳述する 17～18 世紀、地形図の作製や民間での各種地図の刊行などを扱う 19 世紀末～20 世紀前半といった前後の時代に比して、相対的に少ない。また、そこでの論じられ方には、大きく二つの方向性が見られる。第一は、個々の地図を多数取り上げ、それらを通じて具体的に検討していくものである。第二は、地図作製や測量技術の進歩という観点より考察するものである¹。そして双方とも、伝統的な地図作製から近代的なそれへの転換に関して、1880～90 年代に作られた『大清会典図』や黄河治水のための地図に着目する。とりわけ前者に対しては、規

格を統一した全国規模の測量図を作ろうと試みた点や、測量機関の設置に画期を求めている。他方、人員や機器の問題から省ごとに地図の精度が異なるといった限界が存在したことも指摘する [金・丘 1984:162-164, Amelung 2007: 699-705, 『中国測繪史』:477-480 等]。

このように先行研究は、中国全土の動きを視野に入れ、時代の大きな流れを描き出そうとする傾向を有している。そのため、分析対象となった地図は『大清会典図』のような使用目的を限定しない広範囲をカバーするものが多く、軍事や鉄道敷設といった様々な用途を持つ地図や比較的縮尺の大きいものは、十分に検討されていない²。そこで本稿では、外交の現場で活用された地図、具体的には 19 世紀後半の清とロシアとの国境画定交渉に関係した地図を取り上げ考察したい。

清とロシアが接する境界は非常に長く、歴史的にもネルチンスク条約（1689 年）やキャフタ条約（1727 年）以来、数多くの交渉が持たれてきた。特に 19 世紀半ば以降は、シベリア方面でのロシア人の動きが活発になり、その頻度が高まってくる。両国の境界については、19 世紀末の時点ですでに、清側の官僚や学者によって大きく三つの地域に分けて理解されていた。第一は、「東界」と呼ばれる中国東北の吉林省・黒竜江省とシベリア

¹ 代表的なものとして、第一には金・丘 1984、第二には Amelung 2007 があげられる。また、両方の手法を併用する『中国測繪史』もある。

² このような研究として、2 枚の成都図をもとに中国都市図の近代的転回を考察した小島 2010 があげられる。なお、そこで述べられる地図思想における伝統から近代への移行については、Amelung 2007 と異なる部分がある。

東部の境界である。第二は、「北界」とされる外蒙古方面のシベリア中部との境界である。第三は「西界」で、イリ地方や新疆とシベリア西部・中央アジアとの境界である³。以下では、史料状況の関係から、「西界」を中心に検討を進めることにする。

1. 西北の境界をめぐる条約と地図

今世紀に入り、台湾の中華民国外交部から国立故宮博物院に清・ロシア間の境界に関する地図が移管される。それは「中俄両国所簽條約及画定東北・正北・西北等地区边界輿図」と説明され〔陳 2010a : 98、李・林 2010 : VI〕、さらに整理にあたった同博物院の陳維新氏が、西北部分の地図を用いた研究を精力的に発表している。ここでは、清とロシアの国境画定交渉に着目し、地図を使いながら境界の位置や目印となる標識（界牌）の設置場所に関する考察がなされている。またその際に、個々の地図についても、作製経緯や特徴が簡単に紹介される。本章では陳氏による解説を参考にしつつ、清側が所持した地図の特徴を、製図方法の変化という視点から再検討してみたい⁴。

³ 古くは鄒代鈞『中俄界記』に、また戦後の程 1970、呂 2007 等にも見られる。なお鄒代鈞は、「北界」について、キャフタ条約以降大きな変動のないまま辛亥革命を迎えたと説明している〔『中俄界記』第一章 概論〕。

⁴ 本来であれば、各地図の原本を閲覧したうえで検討すべきだが、新型コロナウイルス感染症の影響で現地調査が難しいため、本稿では故宮博物院が開催した特別展の図録（李・林 2010）に掲載された写真等を利用する。なお、地図の画像は陳維新氏の各論考にも写真が掲載されており、次のホームページで閲覧可能である（最終閲覧日：2022年2月2日）。

<https://theme.npm.edu.tw/Academic/Researcher-s-Content.aspx?a=2597&eid=465&q=&listid=25>

(1) 北京条約後の国境画定交渉と境界図

第二次アヘン戦争（アロー戦争）後の 1860 年、北京条約にて清とロシアはキャフタ条約の際に建てたシャビナ・ダバガ（沙賓達巴哈）の標識から西方に向かいパミール方面に至るまでのウリヤスタイ・コブド・タルバガタイ・イリ・カシュガル一帯の境界線を協定することになる。そして 1864（同治三）年、烏里雅蘇台將軍の明誼とクルジャ領事ザハロフが、中俄勘分西北界約記（別名：塔爾巴哈台條約、タルバガタイ界約、塔城界約）を結ぶ〔矢野 1930 : 801-804〕。これに関する地図として、次のものがある。

i) 大清国西北界與俄羅斯国交址地里図⁵

この地図は 1864（同治三）年に作製され、「中俄勘分西北界約記」第一～三款の内容に依拠して描かれている。シャビナ・ダバガからカシュガルおよびパミール高原までの西北界全体を描き、紅線で境界を示している。また左上に年月、右下に清露双方の交渉担当者名が記される⁶。これについて陳氏は、交渉担当者による親筆の署名ではなく、図上に官印もないことから、この地図は正式な分界図ではないとする。そして、総理衙門が原図に依拠して、別に絵製したものと推測する〔陳 2016 : 97、陳 2014a : 118-119、陳 2009 : 180 等〕。

[96&l=1](#)

⁵ 縦 173.5cm×横 176cm〔李・林 2010:16-17〕。なお、陳 2010a : 100-101（カラー）、陳 2014a : 156-157（部分拡大図あり）、陳 2016 : 134-135（部分拡大図あり）にも写真が掲載されている。

⁶ 地図の左上に「同治三年九月／一千八百六十四年」、右下に「大清国西北界查定地里將軍明誼等」「俄国廊密薩爾塔城領事官雜哈勞（ザハロフ一筆者註）／悉畢爾參領廊密薩爾巴布潤福（バブコフ一筆者註）」と書かれている。なお、「／」は改行を示す。

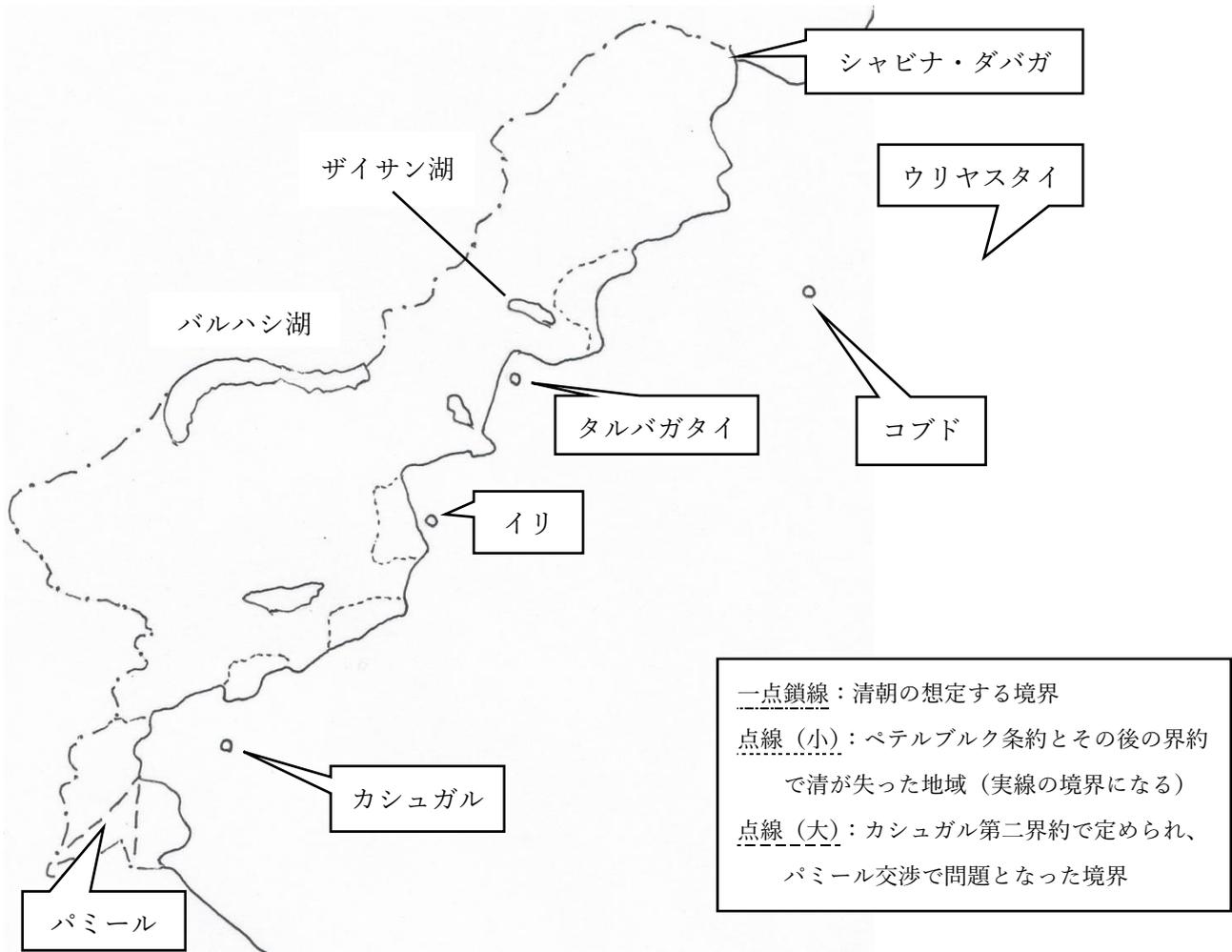


図1：清末西北境界関係地図

※侯 2019:230、李・林 2010: 14-15 掲載の地図等をもとに作成

図録に掲載の写真からは[李・林 2010:16-17]、次の点を確認できる。第一に、対象とするのは境界付近のみであるが、山をぼかしの方法で表現し、湖沼・河川を彩色するなど、かなり精細に描かれている。そのため、測量に基づく地図の可能性はあるが、方位や縮尺など関連するデータは記載されていない。また、緯度・経度も引かれていない。そして、山や湖沼・河川名については全て漢字で表記されている。

ii) 西北中俄交界図⁷

「大清国西北界與俄羅斯国交址地里図」に關係するものとして、「西北中俄交界図」がある。図録の解説によると、後者の作製年月は不明だが両図の内容はほぼ一致するため、同治年間に総理衙門が参考用に繪製したものと推測している [李・林 2010:26-27]。また掲載の写真からは、本図も境界付近を対象に、山をぼかしの方法で表現し、湖沼・河川を詳細に描くという特徴がある一方で、方位・縮尺・経緯線が見られない。

⁷ 縦 24cm×横 78.2cm [李・林 2010: 26-27]。

中俄勘分西北界約記の締結後、両国は現地に委員を派遣し、国境画定にむけた詰め作業を行うことになる。当時のロシアは、現地に測量員を派遣して独自に調査を進めていたと言われている。一方で清は、回民の反乱など西北情勢の悪化もあり、調査のため官僚が現地に赴くことはなかったと指摘されている〔陳 2016: 106、『中国測繪史』: 516 等〕。このような状況下で、同条約を補うべく、1869（同治八）年に科布多参贊大臣の奎昌とロシアのバブコフが科布多（コブド）界約を、翌 1870（同治九）年に烏里雅蘇台参贊大臣の榮全がロシアのバブコフ・穆魯木策傅と烏里雅蘇台（ウリヤスタイ）界約を、同年に奎昌とロシアの穆魯木策傅が塔爾巴哈台（タルバガタイ）界約を結ぶ〔矢野 1930: 803〕。その際に作製された正式図は、現在いずれも確認されていない。しかし、各界約に関連する地図が存在する。

科布多界約と烏里雅蘇台界約については、それぞれ「科布多中俄边境建立界牌鄂博地圖」ならびに「烏里雅蘇台中俄边境建立牌博圖」がある⁸。両図は、中国の伝統的な地図によく見られる技法で描かれ、西洋の近代的な測量図とは違っている。そして両図とも北を上にして、前者には中国伝統の方格（計里画方）が入れられている〔李・林 2010: 44-45, 36〕。

他方、塔爾巴哈台界約に関する「與俄官查勘塔城界址牌博滿文地圖」は、前二図と趣が異なる〔李・林 2010: 40-41〕。陳氏によると、この図は国立故宮博物院所蔵の軍機処档案「與俄官查勘塔城界址牌博換約情形摺」（軍機処档 103214）の附図である。作製経緯としては、まず奎昌が既設の標識をロシア側官員と確認し、次に報告のため締約時の正式な境界図を朝廷へ提出、それに依拠して軍機処の参考用に絵製されたものとする。そ

して、本図に官印や署名が確認されない理由も、ここに求めている。この地図は、地名が満洲語のみで表記され、上が南になっている。そして、紅線で両国の境界を示し、三角形で 10 の界牌が示される。しかし、界牌の所在地を除く地名や山嶺・湖沼・河川の名称、経緯度は記されず⁹、内容はやや簡略なものとなっている〔陳 2016: 111-112〕。そのため本図は、仮に原図が測量図であったとしても、それを忠実に複製したのではなく、あくまで対象地域を参考用に図示した見取図と言えよう。

このように、1860 年代から 70 年代初頭の西北国境交渉において清側で作製された地図は、伝統的な手法で描かれるか、かなり精細であっても方位・縮尺・経緯線が欠けるなどの特徴が見られる。つまり、西洋の近代的な技法に基づく地図とは異なっている。また先行研究では、精細な i) ii) の地図は、いずれも原図からの複製とされている。加えて、当時のロシアが積極的に人員を派遣して測量しているのに対し、清は官僚が現地に赴いた形跡が窺えない。したがって、原図が仮に近代的な測量図であったとしても、清側の作製に係るとは想定しにくく、交渉の過程で提供されたロシア製地図であった可能性が高い。他方、清の製図技術に関しては、19 世紀半ばの時点で、西洋に遅れはとるもののイエズス会の遺産として一定の水準にあったことが指摘されている〔Amelung 2007: 687-691、『中国測繪史』: 465-468〕。以上から、当該時期の清は西洋式の近代的な技術を取り入れ、各種データを完備した地図を作製しようとするのではなく、既存の技術を用いて境界付近を明確にする精細な複製図を作ろうと試みていたと考えられる。

（2）イリ事件とその後の境界交渉

前節で見た通り、1870 年までに清・ロシア間の

⁸ それぞれ李・林 2010: 44-45 ならびに同:36 に掲載されている。なお、前者は 1869 年（同治八年七月初六日）の作製である。

⁹ 図録を見る限り、方位や縮尺も入れられていない。

西北国境は一応画定される。しかし翌 1871 年、1860 年代から続く不安定な新疆情勢を受け、ロシアがイリ地方を軍事占領する。そして、清朝が同地方の秩序を維持できるようになれば撤退するという趣旨の声明を出す。これに対し清は、1875 年、陝甘総督の左宗棠に命じて新疆計略へと乗り出し、1877 年までにイリ地方を除く新疆全域を回復する。そして、イリ地方がロシアに占領されている問題を解決すべく、左都御史の崇厚を全権大臣として同国へ派遣する。その結果、1879 年にリヴァディア条約が締結され [坂野 1973 : 326-327]、新たな境界図として「西北辺中俄二次定界図」が作製される¹⁰。

この図は、同条約第 7・8 条に基づく正式な分界図¹¹で、図左上に崇厚の官印と満文・漢文の署名、ロシア側の 2 名の担当大臣の親筆署名がある。また、日付が「光緒五年八月十七日」とあるので、1879 年製図と分かる。この図は精彩で、紅線で境界を示し、分界に重要な山脈・河川・地名といった情報は中露両国語、それ以外はロシア語で表記されている¹²。ここから陳氏は、本図はロシアが作製したものであると指摘する [陳 2009 : 187、陳 2010a : 103-104、陳 2014a : 119]。

この他、本図の写真からは [李・林 2010:20-21]、次の点が確認できる。まず、図の描かれる範囲は境界付近のみであるが、湖沼・河川が詳細に書き込まれている。一方で、山は必要最小限にとどめられているようで、彩色の濃淡を用いて位置や高低が簡単に示される程度である。また、縮尺・方

¹⁰ 縦 115cm×横 80cm [李・林 2010: 20-21]。なお、陳 2010a : 103 (カラー)、陳 2014a : 158-159 (部分拡大図あり) にも写真が掲載されている。

¹¹ 左上に漢文で「中俄兩國在黎洼^{リヴァディア}定約第七・第八兩條内容分界図」とある。また、ロシア語による同様の説明もある [李・林 2010: 20-21]。

¹² 例えば、地名は基本的に黒でロシア語表記され、一部に赤で漢字が併記されている。

位は明示されているが¹³、経度・緯度は入っていない。

その後、清朝はリヴァディア条約の批准を拒否し、曾紀沢を派遣して再交渉に臨む。そして 1881 年、ペテルブルク条約が締結される。これを受けて、一旦確定していた境界が再び大きく動くこととなり、1882 年以降、両国が現地へ委員を派遣して、再び国境画定交渉を行う。そこで結ばれたのが伊犁界約 (1882 年)、カシュガル第一界約 (1882 年)、科塔界約 (別名：ハバ河界約・科布多界約。1883 年) である。また、後にカシュガル第二界約 (1884 年) も締結される。

この頃になると、それまでの地図とは様相を異にする測量図が登場する。そのうち科塔界約に関するものとして、次の二つが存在する。一つ目は「科塔中俄定界図」である¹⁴。これは、ペテルブルク条約第 8 条を受けた科塔界約の正式図で、右下に清側談判員である升泰と額爾慶額の満洲文字による署名・捺印が、左下にロシア側交渉大臣の署名がある。図上の山川・湖沼・地名などの名称は、ロシア語と満洲語で表記され、後に赤い付箋を貼り付けて漢字名を記している。そして作製年代は、本図の記載から 1883 年製¹⁵と分かる [李・林 2010: 46-47、陳 2016 : 113-114]。

二つ目は「科布多中俄定界図」である。これは、「科塔中俄定界図」と完全に同内容である¹⁶。大

¹³ 方位は北を上、図の上下左右に赤色で東西南北の漢字が書き込まれている。

¹⁴ 縦 56cm×横 73cm [李・林 2010: 46-47]。なお、陳 2016 : 137 にも写真が掲載されている。コブド (科布多) とタルバガタイ (塔爾巴哈台) の間にあるザイサン湖 (齋桑淖尔) から東の地域が描かれている。

¹⁵ 李・林 2010 : 47 にある「光緒九年 (1870)」は「光緒九年 (1883)」の誤植であろう。

¹⁶ 縦 55cm×横 72.5cm [李・林 2010 : 48-49]。陳 2016 : 138 にも、写真が掲載されている。

きな違いとして、白色の付箋で漢字の地名が示されるが、剥がれ落ちたのか、付箋の数は半数以下となっており、ロシア側官員の署名部分にも存在しない。また、付箋同士で漢字への翻訳が異なる部分があることから、「科塔中俄定界図」と同じく正式図だが、別人が翻訳したのではないかと説明されている [李・林 2010: 48-49、陳 2016: 114-115]。ただし写真版を見る限りでは、原図は同じと認められるものの、書き込まれた満洲語の位置が異なっている部分もある。そのため、両図の作製経緯については、署名と押印が同時期になされたのかも含め、さらなる検討が必要だろう。

上記二つの定界図について陳氏は、当時ロシア側が絵製し、清側 2 大臣が署名・押印のみしたものと推測している [陳 2016: 115]。これは、両図のタイトルや説明書きがロシア語で記され、そこに満洲語が書き込まれているので、間違いのないと思われる。加えて写真版からは、両図は図郭を持ち、等高線を使用して高低を表し、縮尺が示されていることが看取される。ただし方位については、どの段階かは不明だが、図郭の外に東西南北が満洲語で書き込まれ（「科塔中俄定界図」の一部には漢字を示す赤い付箋もある）、清側が手を加えていることを窺わせる。一方で、経緯線は入れられておらず、描く範囲は広がっているものの、境界付近を図示するにとどまっている。

カシュガル方面の測量図には、二系統の地図がある。まず「新疆喀什噶爾中俄分界図」であるが、図録の説明によると本図はカシュガルの西北部分を描いたもので、1880 年に作製されている¹⁷。境界を紅線で表し、河川・湖沼・峠などを描いたうえで、ロシア語と現地語の回文で名称を記している。そして清側が、赤い付箋で漢字訳を追加している。本図は図郭の外側にロシア語で、フェルガーナ省一帯の地図で山は省略されていること、原本と同一でロシア総参謀部の局（処）主管上校

¹⁷ 縦 84cm×横 51.3cm [李・林 2010: 86-87]。

が確認していることが書かれている。また左下に、地図の測量者と地名などの翻訳者が記されているという [李・林 2010: 86-87]。

この他写真版からは、境界線を挟み中国側の情報がロシア側と比べて非常に少ないことが看取される。また対象範囲も、境界付近のみではなく図郭いっぱい描かれており、接合する地図の存在を示唆する。

以上より、次の三点が指摘できる。第一に、図示される範囲から、本図が単に国境交渉の結果を示すものではなく、現地の状況を把握する目的をもって作製されたと考えられる点である。第二に、地名などに満洲語・漢字の双方が直接記されていないことから、ロシア側が西洋近代的な測量図として作製し、後に清側が何らかの方法で入手したと推察される点である。第三に、書き込まれた情報量の粗密や現地語である回文の使用から、カシュガル第二界約以前の 1880 年時点におけるロシアの現地調査や地図作製の状況が窺える点である¹⁸。

次に同名で、2 種類の「喀什噶爾中俄定界図」が存在する。図録の解説によると、一方が 1882 年製、もう一方が 1884 年製であることから、前者が東北部分の境界にあたるカシュガル第一界約、後者が西北部分の境界に関する同第二界約（1884 年）締結時の正式図とされている¹⁹。両図とも紅線で境界を示し、満洲語とロシア語で境界各所の地名が記される²⁰。また、両図ともにロシ

¹⁸ これと関連して、1870 年から 1884 年にかけてロシアが中国西北方面に四度にわたり侵入し地図を作製したことが指摘されている [『中国測繪史』:516-517]。

¹⁹ 前者が 40.7cm×42.7cm、後者が 88.5×283.7cm [李・林 2010: 88-91]。

²⁰ 地名については、清側により前者は赤い付箋、後者は白いそれで漢字名が加えられている [李・林 2010: 89-91]。

ア側官員の署名と赤の蠟印がある。後者のタイトルがロシア語で書かれ、ロシア語の説明書きなどの近くに満洲語で訳を記している状況から、陳氏の指摘通り、これらの原図もロシア製とみて間違いないだろう²¹ [陳 2014a : 119-120]。この他図版からは、両図ともに経緯線はないが、色の濃淡で高低を表し、縮尺が記されている。方位については、双方に清側の言語による書き込みは見られないが、後者には初めから方位記号が備わっている²²。

1880年代の条約に関する地図には、作製年は判然としないが、中国の伝統的な技法で作製されたものも複数残されている。例えば、伊犁界約に関する「新疆伊犁中段中俄分界牌博名図」「伊犁中俄定界図」が、それである [李・林 2010 : 60-63]。図録の解説によると、前者は哈密幫辦大臣の長順が伊犁界約を締結した後に、清側が正式図に基づいて絵製したものとされる。そこでは紅線で境界を示し、ロシア語と満洲語で標識に関する地名が入れられる。また、一部には赤い付箋で漢字名が加えられている。一方で後者は、長順が朝廷に報告した上奏文に添付されたものと考えられている。そして図内では、伊犁界約で定められた境界

²¹ 李・林 2010:90-91 の解説によると、後者には同内容の「喀什噶爾中俄定界副図」があり、清側官員の押印があるという。

²² 1880年代には中国東北の境界でも、1860年代に設置した界牌が失われ、多くの紛糾が発生していた。そのため、両国派遣の委員により再度測量が行われ、地図が作製されている。そのうち、1884年と1886年の2幅が趙中孚 1970 : 148 折込地図として掲載されているが、これらは民国期に入ってから複製のようである。それらを見る限りでは、等高線を用いている点では「科塔中俄定界図」と、境界部分の狭い範囲のみを図示する点では「喀什噶爾中俄定界図」と類似しており、今後比較検討していく必要がある。

を紅線で、中俄勘分西北界約記の境界を藍線にて示していることが指摘される [陳 2010b : 100]。両図は計里画方が入れられ、山川・湖沼や集落を絵で示している。また後者では、道路を点線で図示するなどしている。

このように、同時期に清側が保持していた地図は、第一にロシア作製による近代西洋式測量図の体裁をほぼ整えたもの、第二に交渉結果を明示するためにロシア製地図に署名したり手を加えたりしたもの、第三に伝統的な中国の技法に基づくものの三種類に大別できる。このうち、作製過程で清側が関わったと想定されるのは、第二と第三である。第二の地図は精細ではあるものの、満洲語で併記される情報が一部にとどまるという共通の特徴がみられる。これは、作製時の清側による関与が限定的であったことを示している。したがって、1870年代後半から80年代前半でも依然、清側は西洋近代的な測量図を独自に作るのが難しかったと考えられよう。

一方で、当時の清の姿からは、別の一面も浮かび上がってくる。そこでは経緯度は欠けているが、縮尺の備わったロシア製地図を正式図に採用し、方位記号のないものの多くに東西南北を書き込んでいる。そして、漢字表記のない地図に付箋を貼り、利用の便を図っている。また、第一に属するロシア製の測量図も入手している。他方、先行研究では、1870年代には西洋の製図技術の導入が始まっていたことが指摘されている [Amelung 2010: 693、『中国測絵史』:468]。以上から当該時期の外交担当者は、自ら測量図を作製するところまではいかないが、西洋式の製図法への理解が深まるなかで、西洋近代的な技術に基づく地図を重視するようになりつつあったと推察される。

2. 在外公使による西洋製地図の収集と翻訳図

1880年代後半から1890年代になると、ヨーロッパに派遣された清の在外公使（出使大臣と呼ばれる）が、各地で地図を集め、総理衙門に送るよ

うになる。その背景には、外交交渉の最前線にいる彼らにとって、西洋諸国と清が持つ地理情報の差を意識せざるをえない場面が増えてきたことがあったのだろう。そして一部の在外公使は、地図を収集するだけでなく、それらを模写し、地名などの情報を中国語にした翻訳図を作るようになる。これについては Amelung が、1870 年代に西洋製の中国図の収集と翻訳の提案がなされていることを指摘しているが [Amelung 2010: 693]、その後の状況に関する具体的な考察は行っていない。また、個々の翻訳図は外交史研究でも利用されるが²³、地図そのものを主たる分析対象としているわけではない。そこで以下では、「中俄交界全図」と「光緒勘定西北辺界俄文訳漢図」を取り上げ、先行研究による成果を再検討したうえで、両図がもとにした地図について考察してみたい。

(1) 「中俄交界全図」とその評価

一つ目の「中俄交界全図」は、洪鈞がロシア・ドイツ・オーストリア・オランダ四か国の公使在任中に作製したものである²⁴。この図は古くから知られ、様々な研究で扱われている。ただしその多くは、1890 年代に清・ロシア間でパミール地方の帰属をめぐる外交問題が生じた際に、北京の朝廷でなされた議論を分析する中で言及されたものである²⁵。そこでの説明から、本図の特徴をま

²³ 例えば、陳維新 2014a:130-137 がある。

²⁴ アメリカ議会図書館 (LC) 所蔵のものが、ホームページで公開されている。また、林 2014:362-363 の解説も併せて参照。LC のホームページアドレスは、次の通り (最終閲覧日: 2022 年 2 月 2 日)。

<https://www.loc.gov/maps/?dates=1800/1899&fa=segmentof:g7821fm.gct00255/&sb=shelf-id&st=gallery>

²⁵ 1891 年以降、ロシアとパミール地方をめぐる交渉を行うにあたり、清の朝廷では洪鈞の地図に

とめると次のようになる。

「中俄交界全図」はロシアで出版された地図を利用して、1890 (光緒十六) 年に作られている。対象地域は清の支配領域の東北から西北までと、清露国境を広範囲にわたり詳細に描いており、全 35 幅で構成される。洪鈞は本図の作製にあたり、1884 年の時点で出版されていた地図を整理してロシア語から中国語に翻訳しているが、もともなったロシア図は 4・5 幅で、かなり拡大されている。そして本図は、完成後に総理衙門に送られているという [矢野 1967:75、陳 2014a: 120-121、陳 2014b: 82-83]。ただし、具体的にどの地図を翻訳したのかについては、明示されていない。

この他、先行研究では、本図は近代の製図技術である正距円錐法を用いて作られ、ロシアの首都ペテルブルクを起点とした経線が緯線とともに引かれていると解説される [林 2014:362]。これは 1890 年の段階ですでに、製図という点では西洋近代の技術を用いた地図作製が可能になっていたことを示している。また、1880 年代半ばにロシアがパミール国境面定を要求した時点で、清は現地の詳細な地図を持っていなかった [陳 2014a:131、陳 2014b:76]、パミール交渉初期の 1892 年頃でも、清側には現地の地理情報が少なく、頼りにできるのは「中俄交界全図」くらいだった [関 1978:23]、といった指摘もなされている。これらの点は、洪鈞が当該地域における地理的な情報を全面的にロシア図に頼らざるを得ない状況

引かれた国境線に誤りがあるとして問題視された。その際に洪鈞は、陶摸・余聯沅・延茂・準良といった官僚から、ロシアの意図を見抜けないまま、ロシア図を基に境界線を描いたため、交渉が不利になっているなどとして弾劾された。一方で総理衙門は、帰国していた洪鈞が大臣の一人に任命されていたこともあってか、本図はあくまで参考用に作製されたもので批判はあたらなないと反論している [陳 2014a: 130-137 等]。

下で作製にあたっていたことを示唆している。そして経線の起点から、本図は清側による原図からの意図的な改編の非常に少ない翻訳図であると考えられる。

それでは洪鈞を弾劾した官僚たちは、「中俄交界全図」のどこに問題があると見なしたのだろうか。彼らは弾劾上奏にて、乾隆期に設置された紀功碑が国境線の外側に記されていることをはじめ、各地点と国境線の位置関係に多くの誤りがあると主張し、ロシアが恣意的に手を加えていないか疑っている（註 25 併照）。そして同時に、対応策として現地調査を求めている。また批判は、清側の公文書や乾隆期の調査、既存の中国製地図に言及して展開されており、自国で過去に行われてきた調査に基づく情報への信用度は高い。

他方、準良の進言を受けて翌年に総理衙門が提出した上奏文では、「新疆には元来〔近代的な〕測量・製図に精通した人員がおらず、ロシア兵が邪魔するため実地調査に出向くこともできない」と述べられている²⁶。また、ロシア以外の西洋製地図とも比較検討したところ、準良の上奏内容と現地の実情には開きがあると主張する〔陳 2014a:135〕。ここから総理衙門が、自国と西洋の持つ地理情報や製図技術の差を意識し、それを西洋製地図の利用により補完しようと試みていたことが分かる²⁷。これらの事実は、現地の実情把

握を重要視する点では一致しているが、外交担当者と彼らを批判する官僚の間には、信頼できると考える情報、その根拠となった調査や製図の技法・水準に違いがあることを示しており興味深い。

(2)「光緒勘定西北边界俄文訳漢図」の作製と「中俄交界全図」

二つ目の「光緒勘定西北边界俄文訳漢図」は、許景澄がロシア公使在任中の 1894 年に作製したものである²⁸。これは「中俄交界全図」に対する北京での紛糾を受け、ロシアで出されていた中国西北辺境に関する地図を中国語に翻訳・製図したもので、ペテルブルクで印製されている。描く範囲は、コブド（科布多）からカシュガルおよびパミールまでである²⁹。本図については、陳維新氏が紹介および考察を行っている。それをまとめると次のようになる。

²⁶ 「総署奏覆陳帕米爾全地情形並呈進地圖摺」『清季外交史料』卷八十七、一～二葉。原文は「新疆本無精通測繪之員、又以俄兵梗阻、不能前往履勘」である。

²⁷ 陳 2014a:134-136 の延茂・準良の上奏時の状況を併せて参照。なお、当時の清側の地図作製技術については、並行して行われていた『大清会典図』の作製において、人材不足などの理由から西洋近代的な技法で統一した完全な地図が作製できなかったことが指摘されている〔Amelung 2007: 699-705〕。

²⁸ 李・林 2010:24-25。陳 2014a:163-164（部分拡大図あり）、陳 2014b:76-77（カラー、部分拡大図あり）にも画像が掲載されている。

²⁹ 下幅右下にある説明に、「光緒八年至十年勘定北起科布多之大阿爾泰山、南止喀什噶爾之烏仔別里山口、並及未定界之帕米爾、地圖分上下二幅」とある。

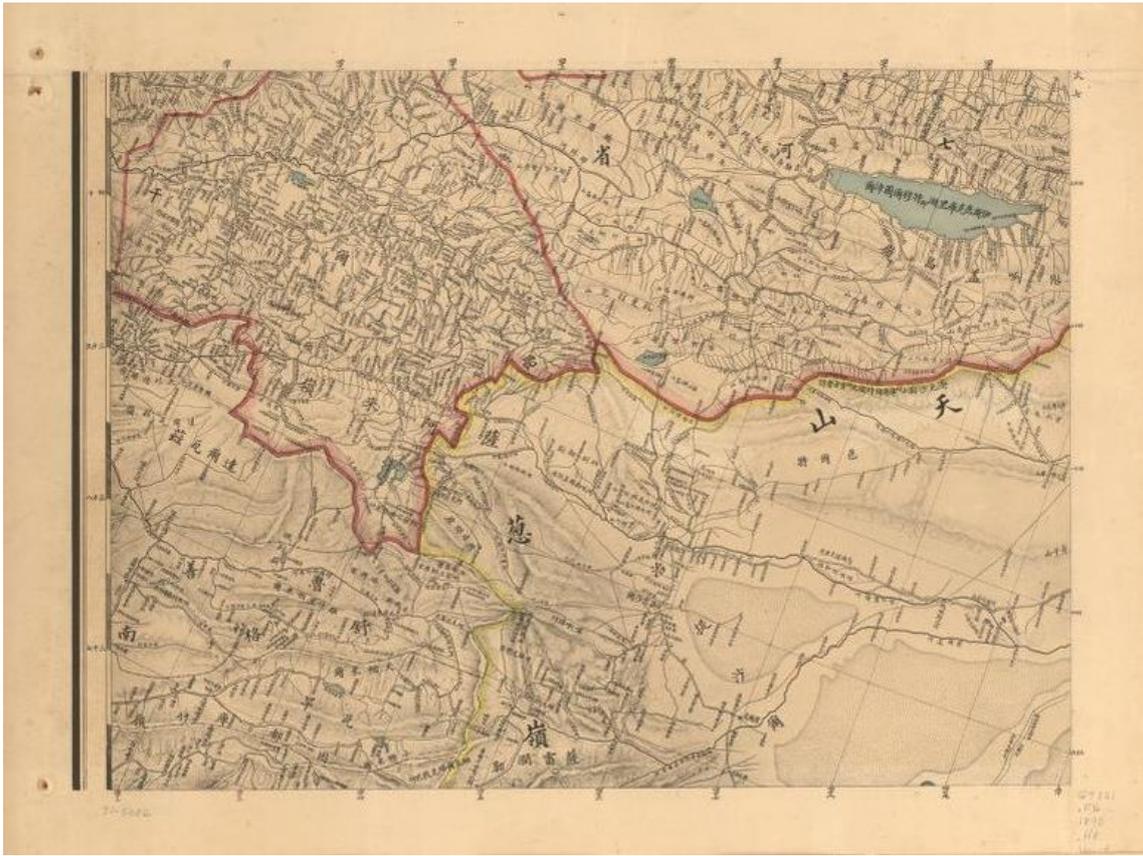


図2 中俄交界全圖 (火七)

※パミール部分。赤と黄色で引かれた線が「国界」を示す。出典は註 24 参照。

この地図は上下2幅で構成され、黄色の太線によりカシュガル第一界約(1882年)とカシュガル第二界約(1884年)で確定した国境が記されている。そこでは、洪鈞の弾劾につながった「中俄交界全圖」における国境線が重点的に修正されており、パミール方面は未定界として線は引かれていない³⁰。また、この地図が作られた背景が二点指摘される³¹。第一は、ロシアが1892(光緒十八)

年にパミールに出兵し、国境の画定を要求してきたことである。そして同年に、「帕米爾(パミール)草図」が先行して作製され、総理衙門に送られている³²。第二は、先述の通り北京の官界において、洪鈞の「中俄交界全圖」が誤っていると批判されたことである。加えて許景澄は、「光緒勘定西北辺界俄文訳漢図」の絵製にあたり、独自の測量に基づいたのではなく、1891年にロシアで出版された「亜細亜俄国南界図」を模写しているとす。ただし、「亜細亜俄国南界図」には、パミールの部分が描かれていなかった。そのため、1885年にロシアで出版された「阿母河図」を参照して補っている[陳 2014a: 122-125、陳 2014b:

³⁰ 上幅には、同治年間に定められた境界線が点線で書かれている[李・林 2010: 24-25]。

³¹ ここでの指摘は、許景澄による例言を根拠にしていると思われる。例言は、「光緒勘定西北辺界俄文訳漢図例言」『許文肅公遺稿』卷十一、雑著、二葉裏～十三葉裏(沈雲龍(主編)『近代中国史料叢刊』第十九、文海出版社に所収)に掲載されている。

³² 陳氏によると、「帕米爾草図」は故宮博物院には所蔵されておらず、遺失した可能性が高いという[陳 2014b:77]

76-83 等]。この他、本図にも経緯線が引かれている。ただし、その基準是北京となっている [李・林 2010: 24-25]。ここからも、本図が「中俄交界全図」への批判を意識して作製されていることが見て取れる。

ここで、「光緒勘定西北辺界俄文訳漢図」と「中俄交界全図」の関係について、両図が依拠したロシア製地図という観点から検討してみよう。前者の「例言」によると（註 31 参照）、許景澄が地図を作製していた当時（1892～94 年頃）、ロシア語の清露国境を描いた地図は、表の通り新旧あわせて 6 種類発行されていた。このうち⑥が最新かつ最も詳細で、彼はこの図に基づき製図すると同時に、先述の④に加え①も利用して内容を補っている³³。

表 翻訳図と関係するロシア製地図

	名称	作製年
①	土爾吉斯坦図	1977
②	阿富汗交界図	1881
③	亜細亜俄図	1884
④	阿母河図	1885
⑤	費爾干省交界図	不明
⑥	亜細亜俄国南界図	1891

※「例言」をもとに作成

一方で、⑥が出版される以前に作製された「中俄交界全図」は③を拡大・模写したもので、①も参考に③に書かれた地名を翻訳・網羅したものだとする。他方、「光緒勘定西北辺界俄文訳漢図」では、基にした⑥記載の地名は③より詳しいが、全てを漢字表記できないため境界付近を斟酌し、清側を詳しく、ロシア側を簡単にしたという。そ

³³ 「例言」第一条に「其間伊犁以東至新疆省城為原図所不及、參用土爾吉斯坦図。喀什噶爾以西帕米爾諸地域、原図未出、參用阿母河図。」とある。

のため、地名が不十分なところは「中俄交界全図」を参照するよう指示している³⁴。ここから、許景澄は北京の官界に配慮しつつも、「中俄交界全図」を全面的に否定するのではなく、相互補完する地図を作っていたことが分かる³⁵。

以上のように、両図には描かれた範囲や経線の基準線に相違が見られる。それには作製時の官界における状況が影響していると推察される。一方で、いずれも自身による測量調査ではなく、1870 年代後半から 90 年代初頭にかけて作られたロシア図を基にするという共通点がある。この時点でロシアは、先述の通りパミールを含む国境地域で測量を進めており、清朝との地理的情報の差は歴然としていた³⁶。したがって、外交に携わる清朝

³⁴ 「例言」第五条に「中俄界図、為侍郎洪鈞使俄時訳印。用俄文亜細亜図、本拓摹其西北交界、參用土爾吉斯坦図、原図地名訳写殆備。今据俄本地名、視前図増密、漢字不能悉標。因酌於交界処校録、特詳内地、稍簡界外、則大概而已。其間名称不備之處、可與洪図互參。」とある。

³⁵ 許景澄以外の在外行使も、「中俄交界全図」を外交に活用していた。朝廷で洪鈞が批判される前年の例になるが、イギリス公使の薛福成は、パミール問題をめぐる 1891 年 8 月（光緒十七年七月）の総理衙門への報告において、「中俄交界全図」に示されたロシアの地理認識に基づき、国境外にあるパミールが清朝領でないとしつつ、対英外交の観点から同地が自国領であるという態度を取る必要があると考えていたことが指摘されている [箱田 2014: 82-83]。

³⁶ ロシアが同地を 1883 年に探検し、1884 年に刊行した地図を、イギリスが翻訳したものがウイスコンシン大学図書館のホームページで公開されている。アドレスは、次の通り（最終閲覧日：2022 年 2 月 2 日）。

<https://collections.lib.uwm.edu/digital/collection/agdm/id/5991/>

の官僚にとり両図は、朝廷での批判の有無にかかわらず、ロシアとの情報の差をうめ、外交に寄与するものだったと言える。つまり、自らの手による西洋近代的な測量に基づく地図作製が難しいなか、当時の外交現場では、それを補う手段として翻訳図を位置づけていたと考えられるのである。

3. おわりに

本稿では、清とロシアの間で 1860 年代から 1890 年代半ばにかけて行われた中国西北国境の画定交渉に関する地図を考察した。外交の現場、とりわけ国境交渉においては、現地の状況把握が不可欠のため、正確な地図が求められる。それは当時の清朝も同じで、総理衙門や在外公館が多く、地図を収集し、複製・翻訳作業を進めていく。これを製図方法に着目して整理すると、大きく三つの段階に分けられる。

第一は、中俄勘分西北界約記 (1864 年) とそれに関連する条約が結ばれた 1860 年代から 1870 年代初頭である。ここで複製された地図は、方位・縮尺・経緯度などのデータが備わっていない。また、清が自ら現地を測量した形跡はみられず、ロシア側から提供された原図を基にしていたと推察される。これらから当時は、既存の製図技術を用いて、外国製地図の情報を頼りに精細な地図を作ろうと試みていたと考えられる。第二は、リヴァディア条約 (1879 年) およびペテルブルク条約 (1881 年) と、それを受けた諸条約が締結された 1870 年代後半から 1880 年代半ばである。この時期は、交渉結果を示す正式図にロシア製地図を採用し、さらに方位を書き加えている。また、ロシアが現地調査のうえ作った測量図も入手している。ここから、独自の測量図作製は難しいが、導入されつつあった西洋の製図技術の影響を受け、求める地図に変化が生じていることが窺える。

第三は、在外公使が西洋製地図を収集し、翻訳図を作製した 1880 年代後半から 1890 年代半ばで

ある。本稿で取り上げた 2 種類の翻訳図は、原図としてロシア製の地図を利用している。また、「中俄交界全図」が正距円錐法により描かれていることから、1890 年頃には少なくとも、製図の面においては西洋近代の技術を用いた地図作製が可能になっていたことが分かる。そして当時の外交現場は、翻訳図も含めた西洋の製図法による地図を重要視するようになっていたと考えられる。

このように外交の現場で使用された地図は、正確性が肝要なこともあり、先行研究が取り上げる同時期の地図と比べ精細である。ただし、自力での近代的な測量・製図が技術的に難しい時代が続いたため、もっぱら外国製地図を参照し、複製・翻訳するなどしていた。そして用いられた製図方法は、1870 年代を境に西洋近代的な技術の影響がみられはじめ、1890 年前後には模写ではあるものの自らその作製を試みるという、先行研究が中国全域を対象とする地図をもとに提示した変遷と、類似の経過をたどっている。したがって、製図方法の推移という点では、用途を限定しない地図も目的別の地図も同様の傾向を示すと推測できる。ただし、地図の描く範囲に注目すると、違いも見えてくる。清が外交交渉に備えて保持する地図には、1880 年頃から図郭いっばいに描かれたものが現れはじめる。これは翻訳図と同じく、接続する地図の存在を想起させる。そして『大清会典図』が、行政区画を単位に切り取る形式で、他地域のものと接続して 1 枚の図にならないのとは異なっている。このような状況が、日清戦争後や民国期の地図作製とどのように関わっていくのか³⁷、ま

³⁷ 陳維新氏は、北京政府期の中露国境を描いた地図について、多くは許景澄の地図を基にしていると指摘している [陳 2014a : 152]。また、「中俄交界詳図」(武昌亜新地学社、1909-10) も、図郭いっばいに描かれており、『大清会典図』より許景澄の地図や洪鈞の「中俄交界全図」に近い。「中俄交界詳図」は、ハーバード大学図書館のデジタ

た中国東北国境など他地域を対象とする地図でも同様の傾向が見られるのか、今後検討していく必要があるだろう。

文献目録

小島泰雄 2010「中国都市図の近代的転回」『歴史地理学』52-1、pp.105-113。

坂本是忠 1967「新疆をめぐる中ソ関係」『アジア・アフリカ国際関係叢書物 第二巻 中国をめぐる国境紛争』巖南堂書店、pp.154-174（初出は1959『月刊共産圏問題』8-1）。

《中国測繪史》編纂委員会（編）・今村遼平（訳）2014『中国地図測量史』。

箱田恵子 2014「英露対立と薛福成—パミール交渉への対応を中心に—」『宮城教育大学紀要』49、pp.79-90。

坂野正高 1973『近代中国政治外交史』東京大学出版会。

柳澤 明 2010「ロシアの東漸と東アジア—一九世紀後半における露清関係の転換—」『岩波講座東アジア現代通史 1 東アジア世界の近代19世紀』岩波書店、pp. 79-103。

矢野仁一 1930『近世支那外交史』弘文堂書房。

矢野仁一 1967「清代満洲を繞るロシアとの国境問題交渉」『アジア・アフリカ国際関係叢書物 第二巻 中国をめぐる国境紛争』巖南堂書店、pp.47-105（初出は同1944『清朝末史研究』）。

Iwo Amelung 2007 “New Maps for the Modernization State: Western Cartographic Knowledge and Its Application in 19th and 20th Century China” *Graphics and Text in the Production of Technical Knowledge in China: the Warp and the Weft*, Brill Academic Pub, pp.

ルコレクションで公開されている（最終閲覧日：2022年2月2日）。

<https://digitalcollections.library.harvard.edu/catalog/990120926430203941>

685-726.

陳維新 2009「同・光年間中俄伊犁边界交渉—以中俄訂定の條約及界図為例—」『故宮學術季刊』第27卷1期、pp. 179-225。

陳維新 2010a「失落的疆域—清季西北边界變遷條約輿図特展選件—」『故宮文物月刊』第323期、pp. 98-105

陳維新 2010b「格登山—清季西北边界變遷條約輿図特展選件（二）—」『故宮文物月刊』第327期、pp. 97-107。

陳維新 2014a「帕米爾界図及光緒時期中俄帕米爾界務交渉問題探討：以国立故宮博物院現藏外交輿図為例」『故宮學術季刊』第32卷第2期、pp. 117-168。

陳維新 2014b「失落的疆域・帕米爾—〈光緒勘定西北边界俄文訳漢図〉簡介—」『故宮文物月刊』第380期、pp. 74-83。

陳維新 2016「清末新疆塔爾巴哈台段界図及界務交渉（1864-1893）」『故宮學術季刊』第33卷第4期、pp. 95-142。

程癸軒 1970『中俄国界図考（増訂本）』蒙藏委員会（初版：1969）。

関玲玲 1978「許景澄與帕米爾交渉（一八九一—一八九五）」『食貨月刊』（復刊）8-2、pp. 21-34。

侯揚方（主編）2019『清朝地圖集 同治至宣統卷』星球地圖出版社。

金応春・丘富科（編著）1984『中国地図史話』科学出版社。

李天鳴・林天人 2010『失落的疆域—清季西北边界變遷條約輿図特展—』国立故宮博物院。

《中国測繪史》編纂委員会（編）2002『中国測繪史』第2巻、測繪出版社。

林天人（著）・張敏（英文編訳）2014『皇輿搜覽—美国国会図書館所藏明清輿図—』中央研究院數位研究中心・美国国会図書館（再版）。

呂一燃 2007『中国近代边界史』上巻、四川出版集團・四川人民出版社。